

平成26年度春期第3回西宮文学講座

阪神間少年 森繁久彌

日時：2014年7月27日（日）14時～
場所：西宮市立夙川公民館 講堂
講師：河内厚郎（文化プロデューサー）
小西巧治（西宮芦屋研究所副所長）

河内

後ほど小西さんから詳しく話してもらいますので、私からは概論をお話します。2009年に森繁さんが亡くなりまして、もう5年になります。新聞の阪神版にも特集がなかったし、地元でも何もイベントがなかったので、森繁ほどの素材を活用しないのはもったいないと思って企画したのですが、枚方では盛大にやっていたし、大阪の高島屋では展覧会もやっていたようです。枚方市出身となっているからですけども、年表をちょっと見てもらいますと、大正2年、1913年に枚方市に生まれ、3人兄弟の末っ子。大正6年、1917年に鳴尾へ転居しています。3～4歳からずっと西宮です。ほとんどこちらで育っていることになります。

生まれたところと死んだところは新聞に載りますが、その途中の、人生で一番メインだった場所は案外と書かれていないことが多い。例えば湯川秀樹。西宮市は湯川記念物理学賞を出していますが、物理学者として人生で一番重要だった時期に西宮で暮らしていたということが忘れられがちです。阪神間で過ごした大事なところが抜けて語られる、その見本例が森繁久彌です。まさに彼の人格の基礎が形成されたのが鳴尾の地であったということを知ってほしくて企画しました。

年表を見ていただくと、大正2年。1913年に枚方で生まれて、父は菅沼達吉、大阪電工常務。これは関西電力の前身ですね。戦前のホワイトカラーの地位は今よりはるかに高かった。さらに常務なので、かなり地位が高い。東京帝大を出ている財界人の父が常務をやっているときに、松下幸之助さんが職工として就職していたそうです。若くして独立して二股工務店というお店を作りますが、松下さんも西宮に屋敷を構えました。西宮にはいろんな人々の物語がある。

森繁さんは2歳の時、父親が早くに亡くなっています。おじいさんがもうちょっと後まで生きていました。大正6年に鳴尾へ転居してきて、枝川保育園に入園。枝川というのは、甲子園の昔の電車通りですね。武庫川から枝分かれしていた川が埋め立てられた。街路樹の立派な広い通りで、お屋敷も多い。路面電車が走っていたのは私もよく覚えています。阪神甲子園駅の南側へ出ると、動物園のある阪神パークへ通じるので、動物の模型がたくさん並んでいて、そのずっと先に海水浴場がありました。

その通りが、甲子園が開発される前、甲子園球場が出来る前は川だった。それを埋め立てたとき、元の堤にあった松の木が、甲陽高校の校庭があったダイエーの前あたりに今も少し残っています。

枝川保育園の保育証書が残っているそうです。それから大正9年、1920年に武庫郡鳴尾村立鳴尾尋常小学校に入学。母方の祖父の森繁姓を継ぎました。今の鳴尾小学校で学んでいたことになります。私の家が祖父の代まで米屋をしていましたが、昔の甲子園のお屋敷に米を届けにいくと、上女中が出てこずに下女中が出てくるというような、お城みたいな家が多かった。いまだに若干残っていますが、そういうところでした。

大正12年、森繁久彌に10年遅れて佐藤愛子さんが生まれています。まだご存命です。「戦いすんで日が暮れて」で直木賞をとって有名になりました。うちの父親は甲陽中学を出ていますが、佐藤愛子さんを覚えているそうです。甲子園から甲南女学校へ通っていて、阪神甲子園駅にいる姿を見たとのこと。お綺麗だったのではないかと思います。

森繁少年は、大正11年、成績優等の賞状をもらっている。頭が良かったということです。

大正13年に甲子園球場が完成。このときから駅前の風景がガラッと変わる。というか、甲子園という駅がそれまではなかった。甲子（きのえね）の年に甲子園という地名が正式にできるまでは、鳴尾と今津の間に甲子園という駅がなかった。今津駅の場所も今より久寿川寄りにあったのですが、そのへんは後ほど小西さんに克明に説明していただきます。

少し残念なのは、大正14年、1925年に、堂島小学校へ転入しています。家は西宮ですけれども、これは北野中学校へ行きたかったということです。西宮市内の公立小学校はたいしたことない。住むにはよいけれども、学校はまだ大阪市内の方が都会的だったということです。

堂島小学校から北野中学校へ進みます。北野高校は今は十三のほうにあります。号泣の野々村議員も出た学校ですが、昔は茶屋町、今の梅田芸術劇場のところでした。ですから、梅田芸術劇場の落成式で森繁さんが「わが母校の跡に劇場建つ」と卒業生を代表して式辞を述べました。

そのあと鳴尾から今津へ転居しています。ちょっと西へ移ったわけですが、阪神電車の南側の海岸近くで走りまわって遊んでいた子供時代だったということです。そのあと早稲田へ進学して阪神間を離れるのですけれども。こども時代の思い出については小西さんにいろいろと語っていただこうと思います。

そのあと旧満州のかなり奥の方へ行って、アナウンサーをした時代がありました。結婚もして、お母さんもいましたし、引き上げは大変だったようですが、なんとか無事に帰ってきて、戦後、俳優として再出発しますが、その前の昭和10年代には東宝劇団に入っています。

舞台の世界で日本の2大勢力と言いますと、松竹と東宝です。歌舞伎は松竹が握っています。東宝というのは、宝塚を東京へ進出させたときに小林一三のつくった会社で、東京宝塚、縮めて東宝です。東宝はミュージカルとか洋物が強い、松竹は和物が強いという風になっていますが、お互いを意識してしまして、松竹も宝塚の成功に刺激を受けて、松竹歌劇団（SKD）や大阪松竹歌劇団（OSK）をつくりました。東宝も松竹の俳優を引き

抜いて新しい歌舞伎をつくろうと。これまで2, 3回試みていまして、私が覚えているのは、昭和30年代に先代の松本幸四郎の一門を引き抜いて、このときは大きな騒ぎになりました。幸四郎は借金があったようで、東宝がそれを肩がわりしたのかどうかは知りませんが、最後は白鸚という名前になります。この移籍騒ぎで、まだ少年だった息子二人も東宝に移ったために、今の松本幸四郎がミュージカルも出来る俳優になったわけですね。松竹にいたままだと「ラ・マンチャの男」なんてやりません。

小林一三が日比谷に東京宝塚劇場を昭和9年につくって、そこで宝塚歌劇以外のジャンルも上演していくために、松竹から俳優を引き抜いた。中村もしほ、これはのちに勘三郎になります。市川壽美蔵。これは市川壽海になり、その養子が市川雷蔵です。それから坂東蓑助という、ふぐで死んだ三津五郎。歌舞伎俳優以外の俳優や女優も入れて、宝塚を辞めた女優さんなども入って、そこに参加した森繁久彌は馬の脚から全部やったということです。満州へ行ってアナウンサーになり、引き上げてきて再び俳優になりますが、だいたい東宝系の映画が中心でした。東宝とは縁があったという事ですね。長谷川一夫が顔を切られる有名な事件も、松竹から東宝へ移るときの話です。長谷川一夫は西宮や芦屋に住んでいたことがあり、甲子園のあたりにも住んでいました。この間亡くなった息子さんの林成年は甲陽の卒業生です。

森繁は昭和28年、1953年、西宮北口の撮影所で宝塚映画『喧嘩駕籠』に出演しています。戦前、小林一三が、宝塚のスターが東京の映画界に引き抜かれていくのが残念で、宝塚に昭和13年に撮影所をつくりました。何本か映画を作ったところで戦争に突入し、一時中断。昭和26年に再開しまして、宝塚で大々的に映画をつくり始めた。日本が独立を回復した頃です。ところが2年後、昭和28年に撮影所が火事で焼けてしまい、小林一三の池田の自宅から見えたという。保険に入っていたので損害はなかったということですが。戦前からのスタジオが焼けてしまったので、この際、本格的なスタジオをつくろうということで、3年かけて、屋内スタジオとしては日本で一番よいスタジオを宝塚につくります。

その3年間、映画を作らないわけにはいかないので、仮説のスタジオを西宮北口につくりました。昭和25年にアメリカ博覧会というのがあり、さすがにもう覚えている人も少なくなりましたが、エンパイアステートビルミニチュアを置いたりして、アメリカに親しませるための博覧会を昭和25年にやった、その跡地が残っていて、急遽そこを撮影所に買い取った。ちょうど映画が全盛に向かっていく頃で、昭和31年に宝塚の撮影所を再開するまでに、たくさんの映画を西宮で作っています。その時に森繁久彌も『喧嘩駕籠』を撮ったということです。

森繁は宝塚映画とは相性がよくて、このあと『世にも面白い男の一生 桂春団治』という映画が評判よくて、同じような傾向の『夫婦善哉』を東宝で撮り、スターになります。

それから、関西歌舞伎がもめごとばかりで嫌気がさしたのか中村扇雀（現・坂田藤十郎）が大阪の松竹を脱退して、小林一三が引き抜き、宝塚映画の専属になりました。宝塚映画

で何本か映画を撮った西宮時代に共演したのが、奥さんになる扇千景ということになります。

その後、宝塚の撮影所が復活してからも、山崎豊子原作の『暖簾』などに森繁は主演しています。これも評判のよい映画です。この頃から石原慎太郎とヨットマンとしても仲がよかった。梅田コマ劇場へ出演するときに、西宮のヨットハーバーで自分のヨットへ泊まっていたこともあったそうです。そういう自由なライフスタイルを楽しむ人でした。

私が演劇評論家になったころ、藤山寛美が松竹新喜劇の名優で、本当にうまかった。ある演劇ジャーナリストが、あなたの一番嫌いな人は誰ですかと聞いたら、「森繁久彌」と答えています。高級ヨットに乗って、大きい家に住んで、「屋根の上のバイオリン弾き」で貧しいユダヤ人の役で同情を買うのは許せないと。藤山寛美はいくら稼いでも借金で消えていくような、楽屋で寝泊りしていたような、古いタイプの芸人でいこうとした人ですが、森繁久彌は舞台と私生活とを分ける近代人でした。

映画俳優としては『夫婦善哉』が当たりましたし、社長シリーズという定番がありました。舞台俳優としても実績ありましたが、森繁劇団を昭和30年につくり、これは普段からメンバーがいるのではなくて、一回ごと一公演ごとにメンバーを集める。藤田まことなど後にそういうことをする俳優は増えますが、森繁が最初にはじめました。

画期的だったのは、日本のミュージカルで初めて本格的に成功した『屋根の上のバイオリン弾き』。

昭和36、7年頃から、梅田コマ劇場が日本で最初の商業劇場でのミュージカルの上演を始めた。越路吹雪と市川染五郎の『王様と私』です。

その頃はミュージカルといっても、高島忠夫は踊れないし、この人は歌えないとか、まだミュージカルが根付いていなかったのも、とりあえず宝塚出身の女優を出して、どの俳優と共演させるかというふうなものだった。

今から見ると、日本人は脚は短かったし、昭和40年頃にチャキリスとか本場のスターが来るようになると、やっぱり違うなということになって、日本のミュージカルはなかなか無理があるなと思っていたときに、昭和43、4年から、森繁が『屋根の上のバイオリン弾き』を始めて、帝国劇場で当たり、大阪の梅田コマでは最初入らなかったのですが、二週目頃から入り始めました。作家の井上靖が書いていたように、当たり前のことですが、何を言っているかがよくわかるミュージカルだったということです。

日本のオペラやミュージカルというのは無理がありましたよね。英語なりフランス語なりのミュージカルというのは、歌詞とメロディーが一緒になっている。それをメロディーだけ持ってきて、歌詞は日本語というのは無理がある。不自然です。

その頃は翻訳も拙くて、新劇でもシェイクスピアなど関係代名詞をそのまま翻訳していました。「that」「what」など「～するところの～」といったような、普段会話で使わないような言葉になっていたものです。

『屋根の上のバイオリン弾き』は翻訳調ではなく普通の日本語として聞けた。森繁久彌

はアナウンサーの経歴があり、NHKのラジオの朗読でも一家を成していましたので、うまくいった。あの名作シリーズを聞いていた人は多いと思います。母音の使い方がうまい。翻訳調になると子音が聞きづらい。日本語は浄瑠璃でも演歌でも母音を使うとよくわかる、くさくなりますが、わかりやすい。原作にあるユダヤ人の宗教的な問題とかは日本人にはよくわかりませんので、浪花節的なしみじみとした人生ドラマとして『屋根の上のバイオリン弾き』は成功しました。それ以来、日本のミュージカルは見られるようになってきた。

森繁という人は、仕事の選びかたがうまい。映画をやめてしまったのは、監督に言いなりの人形みたいな、自分が出せないようなものは嫌だということですね。近代人らしい人で、そのへんが阪神間少年らしいところだと思います。

大衆芸能演劇者として初めて平成3年に文化勲章を受賞します。鳴尾村という枝川と武庫川の間に挟まれた三角州。これが旧鳴尾村になりますが、阪神電車が日本で最初の頃の郊外高級分譲住宅地をつくったところで、当時としてはかなり知的な階層が集まり、後に東京でも、いちごかいという、旧鳴尾で育った人の同窓会のようなものがあって。森繁邸で開かれたこともあったそうです。そうそうたるメンバーで、最近まで行われていたそうです。

今日は甲子園の話から入りましたが、西宮球場を舞台にした小説『勇者たちへの伝言 一つの日か来た道』は、ブレーブスの思い出を見事に描いて、途中からファンタジーに入り込んでいくという不思議な小説です。

私は、谷崎潤一郎から村上春樹まで、結果として阪神間文学というか西宮文学は存在していると言っていますが、西宮という地を最初から意識したものが始めているのです。関学が出てくる小説が中国で話題になっているようですし、いよいよ西宮の文学というのが脚光を浴びてくると思います。

それでは小西さんにバトンタッチをします。よろしくお願い致します。

小西

阪神間少年森繁久彌を話させていただきます。

まずこの「阪神間少年」ということばなのですが、これは村上春樹の寄稿文「辺境・近境」の中で自分自身のことを阪神間少年だったといっているのですけれども、これを森繁さんにつけさせていただきました。

実は、今年の1月17日～28日高島屋で、森繁久彌展生誕100年記念というのが行われていました。これは入場料が800円と高いですが、かなりの人が入ってしまっていて、これだけ森繁さんというのは今でも人気があるなと思ったのと、私自身が行って探したのは、森繁さんが西宮、鳴尾におられたというのがどんな形で出ているのかということでした。色々探したのですが、ほとんどが、森繁さんが俳優として活躍していたところでしたが、やはりさきほど河内先生がおっしゃられたように、生まれた枚方や、最後亡くなった東京の世田谷というのは出ているんですが、西宮の字はどこにも出てこない。しかしその展示

品の中で2つお宝物を見つけたということで、あとでご紹介します。

今日の阪神間少年森繁久彌さんですが、非常に多感な少年時代を鳴尾今津で過ごしたということが一つ、それから成人したあとの東京在住の鳴尾西畑出身の集まりで鳴尾会と、元々はいちごかいという名前だったそうですけれども、これを定期的を開催して、90歳くらいまでやっておられたそうです。それから、宝塚や西宮北口の映画撮影所に来るだけでなく、ご自身のヨットでしばしば西宮へ訪れる。それから文人としても知られています。重要な話として、西宮市の広報誌、それから鳴尾小学校の記念誌にも寄稿して、こども時代の思い出を語っている。その割には新聞にも市の広報誌にも晩年の森繁さんのことが載らないという状況があったということですね。

去年、平成25年の秋期の西宮文学案内で、「西宮スター千一夜」というものをさせていただいて、その時に申し上げたのですが、スターが多く住む町の条件ということで言いますと、住環境が良いということです。西宮は関西の住みたい町ランキングでいつも上位にランクされていますが、スターも、住環境に優れた町に住みたいというのは当然だということです。東京でもスターの中でもトップクラスにいった人は成城に住むとか田園調布とか、そういうところに住むようになって。そういう面でこれは一つであると。

それと、最近の話ですが、主婦が幸せに暮らせる町ランキングというもので西宮が全国で第3位というふうになっています。「aene」アイーネという女性向けの雑誌がこの5月に創刊され、その最初の記事にあったそうです。主婦が幸せに感じるのは、大きなショッピングモールがあるというのが非常に大きな要因らしく、じゃあ今の西宮からららぽーととガーデンズを抜いたらどうなるのかという事もあるのですが、それだけが条件ではないでしょうが、我々としては嬉しいことではあります。

それからスターの仕事場に近いということです。これは現在では東京に一極集中している、関西弁をしゃべっているあのタレントさんも、どこに住んでいるかというと、殆ど東京に住んでいます。しかしながら、阪神間にもスターの芸能活動する場はありますので、西宮に住んでおられる方も多いと。かつてはスターの職場の撮影所が西宮北口に、レコード会社などは今津にありましたね。マーキュリーレコードなんかがあった時代もありました。

そういうのがあって、以前は今よりももっとスターが多くおられたということです。

西宮ゆかりのスターということで、西宮で芸能活動をしていたとか、西宮で生まれた・育った、学校に通っていた・卒業した、住んでいる・住んでいたなどでお話させていただきましたが、この条件に全てあてはまるのが、森繁久彌さんですね。北口の撮影所、鳴尾西畑にすんでいた。鳴尾小学校に通っていた。鳴尾と今津と、趣味のヨットで大人になってからしばしばヨットハーバーに訪れたというのが森繁さんということです。

年表で説明させていただきます。父は東京帝大を出られて、日本銀行、大阪電燈にこられた。母は大阪の商家の娘、それも裕福な商家だったそうですが、父が亡くなったあと、鳴尾にこられた。それが、鳴尾の西畑にできた、当時鳴尾文化村と呼ばれる非常に大きな、

立派な家の借家だったそうです。阪神電鉄が作った、借家の地区を鳴尾文化村と呼んでいた。

先日の森繁展で、わたしが発見したのは、保育証書というものでして、枝川保育園に入園したという、この保育証書が非常にきれいに残ってありました。大正6年10月～大正9年3月25日まで保育したことを証す。菅沼久彌という名前で飾ってありました。森繁さんはその後戦争もあり、満州にも行かれたなかで、これを大事に残していたということです。それから後、大正9年に鳴尾村立尋常小学校へ入学した。ここで祖父の姓をひきついだということですね。

松下幸之助さんとの出会いの話があります。

1964年に、「7人の孫」という人気のテレビ番組がありまして、これを松下電器が提供していたのですが、数年後、松下の本社から、森繁さんに電話があり、松下幸之助さんが会いたいということで直接会うと、非常に腰が低く、「先生はびっくりされるかもしれませんが、私は先生のお父様の下にずっとおりました」ということで、幸之助さんが内線見習工として入社したのが1910年明治43年だったということで、森繁さんのお父さんは大正2年までおられました。大阪電燈の役員として。つまり、松下幸之助が入った頃は、役員として、雲の上の人だったと森繁さんにお話されたということです。この後、ご承知の通り松下幸之助さんは電燈会社をやめて、二股ソケットの製造を大阪の方で始めたということです。

ここでおもしろいのは、「7人の孫」で、一番年長なのが、勝呂誉だった。1940年生まれ。当時森繁さんとの年齢差は27歳。27歳というのは子供と親の関係ですが、あれを見ていて、確実におじいさんに見えた。いしだあゆみも孫の一人で、1948年生まれなのですが、森繁さんの当時の年齢はまだ50歳少しでした。

今日この会場を選ばせていただいたのは、鳴尾支所のところに、鳴尾尋常小学校跡という碑が立っております。出られて少し東にあります。

そうということで、森繁さんたちがここに住んでいた頃、鳴尾西畑文化村というところは、鳴尾といっても、今の感覚だと甲子園です。阪神の甲子園の駅の真南になります。バスターミナルがあって、三井住友銀行がありますが、あれより東側に、西畑公園というところがありますけれども、あそこに70戸ほどの文化住宅。この文化住宅という言葉は、私達は非常に安っぽいアパートを想像してしまいますが、そういう意味ではなく、当時は非常に立派な家だったということです。借家ですが、そういうところに住む方というのは、当然ホワイトカラーでも十分な収入がある人しか住めませんので、裁判官ですとか、大手の会社の幹部だとか、そういう人が住んでいたということです。その中には、少年時代の森繁久彌ですとか、作家の佐藤紅緑だとか、(サトウハチロー、佐藤愛子の父)がいました。

鳴尾村史という本がありまして、これは非常に立派な本です。今日の会場の鳴尾会館は西宮市の施設ではありません。これは鳴尾の財産区ということで、昔鳴尾村といわれていたときの共有地をベースにしてできたものとなっております。これが今も存続しており、

この建物も財産区の持ち物です。鳴尾村史もそこが作ったものとなります。これは非常におもしろく、最初から森繁久彌さんとの対談だとか、佐藤愛子さんとの対談というところからはじまりますし、中に書いてあることも非常に興味深いことが書いてある。読み物としても非常におもしろいです。皆さんも今日の機会に図書館などでご覧いただければと思います。

少し見づらいですが、鳴尾の地図です。鳴尾村というのは、枝川と武庫川に挟まれた地域なのですが、ちょうどこの道が枝川が埋められた跡です。当時の鳴尾は一大リゾート地でした。

西畑というのはどうかというと、鳴尾のはずれです。阪神電車が走っておりますが、甲子園球場ができるまで、甲子園には駅がなかった。ということは、今の鳴尾駅までは西畑から距離があり、当時はこの川が流れていて、非常に寂しいところでした。

いずれにしても、西畑にあった家から尋常高等小学校まで森繁さんは通っていたということです。

先日私が森繁展で発見したもう一つのものというのは、第2学年成績優等の賞状ということで、これは大正11年3月26日となっており、ちょうど2年生の終わりに出された賞状です。そこに、菅沼久彌は非常に成績が良かったので表彰しますとあります。つまり、森繁展にあった鳴尾に関したものはその二つだけだった。しかし西宮という言葉は一言もでてこなかった。ただ、嬉しかったのは、森繁さん自身がそれを大事にしてくださっていたということです。

翌年の大正12年1923年に関東大震災があり、この年に佐藤愛さんも生まれています。このあと、西宮には色んな人が移ってきています。佐藤愛さんは実は西宮生まれではなく、生まれてから西宮にきたのです。佐藤愛さんのお父さんも、東京で仕事をしていた被災して移ってこられたと。谷崎潤一郎さんもそうです。あと色んな向こうにあった文化的なものもこちらへきています。映画のキネマ旬報も夙川の方へ移っています。

それから1925年甲子園球場が完成。当時森繁さんは5年生でした。甲子園球場は今年で90周年ということです。今年はJR（官営鉄道）が通ってから140年になります。それから阪神電鉄は、明治38年1905年にできていますので、昔の国鉄ができてから29年経って阪神電鉄が通った。つまり、29年間阪神間は、主に人が乗る鉄道がなかった。国鉄は走っていたと言っても、途中であった駅は西宮だけ、あとからできたのは現在の尼崎である神埼ができ、住吉ができ、というように、ぼつりぼつりとできていったが、当時はまだまだ人が通勤するような電車ではなかった。阪神電車ができてから、別の場所へ住んで、大阪へ仕事で通うというようなことができた。

森繁さんは鳴尾小学校での卒業記念写真はありません。途中で転校した堂島尋常小学校から北野中学校へ行っているからです。本人がどうというよりも、お母さんが教育ママで、行かされていたということのようです。

森繁少年が見た鳴尾村の風景というものが、森繁さんの寄稿文として、現在の鳴尾小学

校の校長室の壁にかけてあります。これが一つ一つ大きくしたものです。この文章が皆さんにお配りした資料にあります。平成5年の鳴尾小学校の創立120周年に森繁さんが贈られたものです。

“枝川の清き流れに鮎つかみしいないどころ、桜の並木は遠く家まで続いていた。競馬場の馬は走り、時に曲乗りの異人スミスはボロ飛行機を馳せて鳴尾の上空を飛んだが、高い金を払って同乗した魚屋の主は初めてみる広いふるさとに感嘆しながら、いちご畑に墜落して命を落とした。甲子（きのえ）の年、無残やが、いとおしき川は水が止まり。やがて天を祀る高層建築はなり、人これと呼んで甲子園と言う。私どもの鳴尾・今津の川を挟んでの戦争ごっこも終局を告げた。松林の幼稚園も無くなり、蝶も魚もどこへ行ったのかと。私は、菅沼久彌から森繁に変わった。新しい学校を知らない。でも、平野先生は忘れない。生意気な訓導でいつも恩師の懐中時計を見ながら甲をつけてくれた。同級生の瀬川は、少年棋士で、うちのじいさん達といつまでも打っていた。後には九段にもなり、名人にもなった。一面のいちご畑も、シーズンまでは、糞尿のにおいしきりなる乍らあれど、一面に紅の弾く頃、少年達は畑に入って盗み食いして、見張親爺にこっぴどく叩かれた。何にしても、心のふる里である。北野中学に入ったが、私たちはまだ鳴尾にいた。平成5年6月 森繁久彌（80歳） 母校鳴尾小学校へ贈る

これは、20年前ですが、森繁さんが鳴尾小学校に送られた文章です。当時鳴尾がどんなところだったかという事が現れています。当時の鳴尾村というのは **seashore resort** 海辺のリゾート地でした。

イチゴ畑があり、高級住宅があった。競馬場があり、ゴルフ場があった。曲芸飛行というのは、飛行場・広い場所で、アメリカ人の飛行機乗りがきて、曲芸飛行を行ったということです。これを見に集まったのは30万人だったということです。

私の父親の母が鳴尾の出身で、私の父親がこどもの時に、複葉機のアクロバティック飛行をみたとか、阪神パークでクジラをみたとか言っていたのですが、あとで資料で調べたら全部本当でした。いずれにしても、野球場もテニスコートもあった。さらに甲子園ホテルができたということでまさにリゾートだった。

こういう考えを誰がしたかということなのですが、三崎省三さんという方が阪神電鉄の初期におられた。この方はアメリカに留学して行って、当初は貿易を学ぼうとして行ったのですが、途中でやはり、一つの技術を学ぼうということで、電気工学を勉強して、日本へ帰ってきて、働いていたところを阪神に引き抜かれ、最終的には阪神の社長にはならなかったが、実質阪神電鉄にこういう考え方を導入された方です。

この鳴尾は、先ほど言ったような競馬場などがありますが、海は甲子園の海水浴場であったということです。さきほどシーショアリゾートと言いましたが、甲子園球場はニューヨークヤンキースのスタジアムで、シーショアリゾートはコニーアイランドということになります。戦後しばらくしてコニーアイランドショーとして、日本各地でコニーアイラン

ドの遊園地施設が巡回しました。私の記憶では西宮北口かなと思っていましたが、神戸の三宮かもしれません。東京では神宮なんかでもやっていました。

今でも残る鳴尾競馬場の建物ということで、現在は武庫川女子大学の一つの校舎になっていますが、これは終戦後のことで、先ほどお話ししたリゾート地が、戦時中は川西航空機の一大生産拠点になっていました。

これが滑走路、管制塔に使われていたのは、競馬場の建物という風になっている。

これが焼け残りましたが、今の武庫川学院の芸術館というところで使われています。これはちょうどらぼ一との南側の方にあります。さきほどのリゾート地のどれかです。鳴尾という名前はゴルフ場に残っています。川西の方にありますが、あれはこの鳴尾の名前を継いでいます。競馬場は、宝塚に移っています。ルーツは全てここだということです。ちなみにゴルフ場は、その前に六甲山にあったものが、魚崎の方にもゴルフ場ができた。その話は谷崎潤一郎の小説の中にもでてきます。

その後の森繁久彌さんとはいうと、早稲田大学で軍事教練を拒否して大学を中退したということです。戦前に東京宝塚劇場の新劇団に入った。その後アナウンサーの養成学校に入って、3ヶ月の期間後満州に赴任したということです。この辺は去年やった愛新覚羅さんと時期は一致します。

それから戦後本格的な芸能活動が始まります。昭和22年衣笠監督の「女優」という映画に出ています。これが初めて出演したものとなります。その後、3年後に新東宝の「腰抜け二刀流」という映画で初主演をしています。その後昭和27年。源氏鶏太のサラリーマン喜劇「三等重役」で要領の良い人事課長役をやったのですが、これが当たり役になりました。その後社長シリーズへと発展していったということです。

宝塚映画と森繁久彌ということですが、森繁さんが初めて宝塚映画にでたのが、北口の撮影所でした。それが「喧嘩駕籠」というやつで、ここに出ている人たちはそうそうたる人たちで、トニー谷、柳家金語楼、森繁久彌、大谷友右衛門、八千草薫。大谷友右衛門は後に中村雀右衛門となり歌舞伎の重鎮になった。この写真には文化勲章受章者が二人並んでおります。森繁さんと、大谷さんですね。私はたまたま何年か前の11月3日に東京の歌舞伎座に行っていましたが、雀右衛門さんが首から勲章をぶらさげて来られて舞台に立ち、「ただいま、皇居でいただきました」という挨拶をされていました。

そういう二人が昭和28年に「喧嘩駕籠」という映画で、西宮北口で映画を撮っていたということです。

「飛びっちょ勘太郎」とか、「河内風土記 おいろけ説法」あと、「世にも面白い男の一生 桂春団治」「野良猫」「花のれん」とか、映画界でも非常に重要な地位を確立していったということです。芸能活動とは別に、海の男森繁久彌として、趣味として、ヨットマンとして有名でしたが、非常にお金のかかる趣味です。今の西宮のヨットハーバー、昔からあった方は西宮マリーナ、新しいのは西宮の埋立地の方にできております。特に、森繁さんが来られた頃というのは、沖合いの方はなかったわけです。今の西宮マリーナというところ

で係留されたりしていました。

西宮マリーナの社長から聞くとところによれば、どんな人がヨットを持っているかというと、7、8割はお医者さんらしいです。弁護士さんは少ないということです。サラリーマンではなかなか持てない。但し、何人か組んで持っている人もいます。いずれにしても、昭和34年というのは今からもう50年以上前ですから、その頃にもう自分のヨットを持っていたというのは非常にすごいです。

石原慎太郎から、「太陽の季節」などの頃に紹介されて、35フィートを譲り受けた。これがメイキスという名前をつけた。それから、1964年、東京オリンピックの年にありますが、今度はもっと大きな73フィートのふじやま丸を建造したということです。この規模になると、専任の船長とか機関長がいる船となります。そのあと、森繁さんがふじやま丸を係留するためにマリーナを作ったということです。それを維持するのが大変になって、日産が肩代わりして、現在の日産の佐島マリーナになったということです。

その後、1991年、森繁さんが平成13年。80歳くらいまでヨットに乗っておられたということです。

そんな、海の男の森繁久彌さんですが、これも森繁さん自身が色々なところに書かれておりまして、森繁さんの書かれた「アッパさん船長」という本がありますが、メイキス号が、三浦半島から出て、太平洋側を通過して、大阪湾に入って、淡路島から岩屋に、最終的に西宮に帰ってきた。やはり彼自身のふるさと西宮だという思いが強かったということですね。

この時のことが「アッパさん船長」の中にはこのように書かれています。

“船首に花束とシャンペンを結び、万国信号旗をマストいっぱい、満艦飾のメイキスは正午、60杯のヨットに迎えられ、私を育てた思いで深い西宮の突堤を回った。六甲の山の上に白い雲が飛んだと思ったら花火が初夏の空にこだました。アドバルーンがあがり、「祝故郷入港、森繁船長」の文字が見える。そして岸壁上から、千人ほどの人たちの歓声が海を流れていく。”

この時森繁さんが入港したあと、西宮神社にお参りされています。今日の会場に来ていただいているが、当時の神主さんのお話しによれば、本当に船長さんの格好のまんま西宮神社にお参りになったということです。その後、すごいことが起きた。命拾いした森繁久彌という事で、先ほどの2つ目の大きなふじやま丸についてこう書かれています。

“借金まみれになりながら、一年がかりでふじやま丸を完成させ、進水式には皇族や大臣などを招き、管弦楽団の演奏でもてなすという豪華の絶頂を味わう、直後大阪で舞台に立った森繁はふじやま丸を西宮に係留する。ところが、公演期間中のある日、台風が港を通過することを心配した森繁夫妻は船に泊まる。風雨の凄まじさに目を覚ました時には、船は木の葉のように嵐にもまれ、座礁、船を捨て、救命ボートで海に降りた森繁夫妻は、嵐にもまれ海の藻屑になりかける “

という。こういう風になりましたが、助かりました。これは、ヨットハーバーの人に聞き

ますと、イカリのかけ方を間違った。ヨットマンは台風の時でも、うまくすれば、皆船に泊まったそうです。それほど船というのは、ちゃんとしさえすればあの中で過ごせたということです。いずれにしても森繁さんはヨットハーバーの皆さんの救助で命からがら助かったということでした。命は助かった。全員無事だった。その前に西宮神社にお参りしていたからだと思うわけです。

最後に、西宮市勢要覧に書かれた文章があります。まだ甲子園駅がなかった時代の絵ですね。今津というのは今の今津ではなく、阪急がくるまでは今の久寿川駅が今津駅だった。甲子園球場はできたのですが、枝川の近くに申川（さるがわ）という川があって、申川と枝川の中州を埋めて作ったのが、甲子園球場だということです。ちょうど駅もないところに西畑の町があった。ここに松の木がありますが、森繁さんの文章によると、よくそこで首吊りがあったということです。松はまだ残っていますし、土手の名残りもまだ残っていますよね。売店がたくさんあるところです。枝川の土手だったということです。

半世紀前の西宮は、今回の市長選挙でもこの辺の話しが蒸し返されていたところがあったのですが、沖合いを埋め立てて石油コンビナートを持ってくるという話がありました。1954年に日石誘致を発表した。時の市長さんが、田島淳太郎さん。日石誘致は市議会で議決されましたが、酒造メーカーが団結して反対運動が起きました。結果、市長選挙で最終決着がつきます。まだ田島市長が現職のままだった。その後選挙があって、現職がやぶれ、辰馬さんが選挙で勝った。その後、西宮沖は埋め立てしないということが決まった。この時、森繁さんが、この埋め立て賛成派に使われかけた。

西宮今昔というものを書いてありますが、5～6行目、

“わが西宮があのまま、今も同じ変わり映えもせぬ古臭い町であってはかえって困り物だと思ったことがある。最近宝塚映画の仕事やヨットのことでの訪問の機会も増えたが、そのたびに、そのめまぐるしい発展に驚かされる。さびしいといえさびしいが、私は大いに祝福している。2月に東宝劇場に森繁劇団の旗揚げを祝って田島市長の来駕を受けたが、その折、楽屋で市長の10年後の構想を聞いて、目を見張った。大なり小なり邪魔のある話だったが、私としては同じ古い西宮人は望愁のセンチメンタリズムを捨てて、近代都市への発展に多いに心を開くでしょう。おもしろくないとすねるのはいいとしても、提灯持たずとも、せめて無用の邪魔だけは避けるべきである。”

これはどういうことかと言うと、日石誘致を反対する人へのメッセージだったのです。森繁さんは、この一文を「西宮今昔」として西宮市勢要覧に寄稿しています。グラフ西宮と市勢要覧は違います。市勢要覧というのはもっと色んなデータが書いてあるものなのですが、このときの市勢要覧はこんな文が載っています。このように、森繁さんが肩入れしたのか、肩入れさせられたのか、わかりませんが結果として、実現はしなかった。

50年前は企業誘致、今は逆に企業撤退というのが一つの争点になったわけですね。結果どうであるかというのはこれからの事だと思います。西宮の半世紀前にはこういうことがあったということです。

文教住宅都市の歌を中学のときに毎日のように歌わされてきました。私はこれが市歌だと思っていました。この歌は今でも歌えますが、西宮の市歌は未だにどんなものか知りません。これは喜志邦三さんという方の「春の唄」を作詞された方がこの歌の作詞家でもあります。

この方は、神戸女学院の先生をされていました。家は西宮北口の昭和町。甲子園口の方にもその後移られました。

今度は神戸女学院出身で有名な作詞家、去年亡くなった、岩谷時子さんのことです。西宮生まれではないですが、当初は浜脇小学校に入っておられて、途中で新設の**安井**小学校、そこから女学院へ、つまりずっと西宮にいるということになります。この岩谷時子こそ、亡くなくても誰も書きませんし、市の広報誌の載るわけでもありません。ということで、この秋に「作詞家を生み出す町西宮」というものを秋季講座で考えています。次のコマーシャルということでさせていただきたいと思います。

それから、市のホームページの中で過去にさくらFMで放送したものを聴けます。さらに、西宮文学案内で、後でテープ起こしされ、西宮文学回廊というホームページで西宮文学案内の内容が全部見れます。

去年の8月に「甲子園鳴尾に関わる文学と文人」というものをさくらFMで4週間にわたってさせていただきました。これも今からでもお聴きいただけます。その中でも森繁さんの話にも触れています。西宮市では、このようにツールは良くできてきています。

今回、一言最後にまとめておきたいのですが、西宮市民ゆかりの記憶が、市民共通の資産として活用できていなかったのも、今後やって欲しいのは、今日皆さんにお渡しした資料は、全部西宮市のものです。どこかの出版社が出したものではない。学校や、広報の担当などが出しているものです。これだけ森繁さんは市に寄稿しています。しかし、こういう機会がないと、忘れられてしまう、何の役にも立たない。今日だって150人近くの人に話しをただけとなるのですが、やはり、森繁さんが文化勲章を取られた、あるいは亡くなった。そういうタイミングで、市が出すべきですね。そうすると市民がわかる。そうすると、日本中の人が西宮市とのつながりもわかる。たった4歳までしかいなかった枚方市が森繁の町なんて言っている。意味があるからやっているのであって。世田谷区には森繁通りというものもあります。ゲゲゲの鬼太郎の水木しげるさんにしてもそうですが、西宮にいたときに新聞にも載っているということもあります。西宮では何もされていません。岩谷時子さんも同じです。これをうまく発信することで、西宮の都市格というのは上がると思うし、私は、ぜひとも市民の人に聞いていただきたいと思います。

今日の文学案内ということで、8月9日（土）です。チラシが入っていますので、8月9日（土）に阪神南県民センターが阪神南再発見モニターツアーというのを企画しております。阪神の尼崎駅に集まっていただければ、バスでカトリック夙川教会などをまわります。西宮神社でバスをとめて、食事は自由にしてください。

お弁当と水筒を持ってきていただければ、一銭も使わずに楽しんでいただけます。

定員を超えると抽選になります。抽選に落ちた方は運が悪かったということで納得していただきたく思います。申込み方法がインターネットのみとなっております。あにあん倶楽部に入ってもらいたいということです。「あにあん倶楽部」と入れていただければ、HPが出てきます。これは西宮、尼崎、芦屋をまとめると、犬の形にそっくりです。山口のあたりが犬の頭。脚が芦屋。犬のお尻が尼崎。是非とも申し込んでいただきたいと思います。

河内

姑が川越で入院しているのですが、兵庫県西宮市から来たと言うと、あの号泣議員の西宮というのはどんな町ですか、と聞かれたので、40万都市の規模でありながらプロ野球団とプロのオーケストラを持つ街だと言いました。こういう街は西宮しかありません。100万都市や200万都市にしかないようなものが西宮にはある。西宮は演歌が似合わない町とか言われますが、岩谷時子さんのようにモダンな作詞家が出てくる。秋の講座では「作詞家の生まれる街・西宮」をやりたいのです。

皆さん、今からバレリーナやピアニストになるのは無理。小説家はあながち夢ではないかもしれませんが、やはり難しい。作詞家だけは専門学校に行っていなくても可能性はあります。西宮市文化振興財団理事の高田直和さんという方は小林幸子の「思い出酒」の作詞をした方です。大阪万博の歌に入選した島田陽子さんも夙川で育った方でした。

西宮を作詞家が出てくるまちとして位置づけたい。私は審査員を結構やっています。楽しむだけでなく、野望を持っていただきたいと思います。ありがとうございました。